

6 + 3 = 9 ? (学校運営協議会「杉並区学校運営協議会連絡会」)

令和4年度 杉並区学校運営協議会連絡会 次第

- 1 開会挨拶
教育委員会事務局次長 齊藤 俊朗
- 2 講演
「小・中学校の連携について」
教育長 白石 高士
- 3 グループ討議
「9年間の学びの階段を考える」
- 4 閉会挨拶
教育委員会事務局学校支援課長 宮崎 敬司

杉並区立小・中学校は令和3年度に全小・中学校に学校運営協議会が設置され、地域運営学校（コミュニティ・スクール）になりました。各学校の学校運営協議会の会長や職務代理をはじめとする各協議会の代表者に出席いただくのがこの連絡会です。

連絡会は年に1回開催しており、目的を、地域運営学校の運営や活動内容等について意見交換をすることとしています。今年度もファシリテーター（会の進行役）を合同会社Active Learnersの山ノ内さんと米元さんをお願いし、活発な意見交流、情報交換の場となりました。今年度のテーマは「9年間の学びの階段を考える」として、小学校6年間、中学校3年間という考え方だけでなく、地域で育つ、地域で支える9年間として一人ひとりに何ができるかを考える場としました。



↑ファシリテーターの山ノ内さん



↑教育長の講演

まずは、教育長から、大きく2つの柱で講演がありました。1つは「一人一人を大切にできる社会に」、もう1つは「連携すること、対話すること」です。

「一人一人を大切にできる社会に」については、杉並区教育ビジョン2022で「子どもの思いを尊重する」ことを教育の当事者として心がけたい視点を挙げていること、こども基本法が令和5年4月1日に施行されることなどから子ども一人一人を尊重することが求められると話がありました。学校も管理・監督する場から考える場、子どもが主体的に活動できる場を設定することが大切であり、子どもに関わる全ての大人に考え方の変革が求められていることが伝えられました。

「連携すること、対話すること」では、生きていくための基盤をつくる義務教育は9年間であるが、子どもたちは地域の中で、もっと長い時間を過ごしていること、また、地域とは人であり、地域には小・中の段差はないということが話されました。

連携を推進するには「よりよい人間関係の構築」が必要であり、そのためにはしっかり対話すること、互いのよさを認め合いながら歩み寄りを心がけることなどが重要であるとの話がありました。これは、学校運営協議会と学校、学校と子どもなど、どの関係でも同じことが言えるのではないのでしょうか。



↑全体の様子

2枚めは「グループ討議の様子」です

本日のゴール

「小・中学校の連携について下記のアイデアが出されている」

- ① 9年後にどんな子どもたちになって欲しいか
- ② そのために私たち（学校・保護者・地域住民）は何ができるか

グループで話し合われた内容をご紹介します。
※グループとコメントは一致しておりません。

子どもたちには地域の担い手になってほしいね。

自分の思いを伝え、周りのことを考えられる人に育ててほしい。

地域や保護者へ活動を広く周知していこう。

無駄と思える時間にヒントが隠れていることもある。

ななめの関係で接する大人が必要なのかもしれない。

小中で一緒にキャリア教育をやってもよいのでは？

学校運営協議会として、保護者や児童生徒、他校のCSとどうつながりをもつべきか。

公立学校ならではのよさをもっと伝えていきたい。

失敗経験は大切。自信がない子が多いのかな...自由な遊びの空間を確保しては。

思いを尊重することは選べる機会をもつことで、それが自分と向き合うことになるのでは？

地域全体をフィールドに大人も学べる場づくりをする。

形式的な交流だけでなくフランクに交流できる場があるといい。

グループ討議では、それぞれの立場で何ができるか、何をすべきかについて多くの示唆に富んだ内容が出され、メンバーを替えながら会場全体で共有していました。

教育委員会では、これからも皆さんと一緒にあって対話しながら、円滑な学校運営協議会の運営の支援をしていきます。

子どもの駆け込み寺があるといいのかも。